

沈黙

株式会社藤野屋 代表取締役

藤森 靖久

人間の思考には、順序がある。一番深いのが、「ベリーフ (belief)」。一度、信じ込んだら、「信念」は変わらない。宗教への信仰などが、正にこれ。恐ろしい面もあり、その考えを変えさせるのは、至難の業。

次に、「フィロソフィー (philosophy)」に「ヴィジョン (vision)」と続くが、「哲学」は、論理や知性で、「見識」は、現実や時流で夫々の考え方は、変わる。

遠藤周作の歴史小説『沈黙』一九六六年作。

——舞台は、一六三〇年代。家光の治める徳川時代。幕府は、「島原の乱」を鎮圧後、更に鎖国を強め、キリスト教を禁止。キリシタン弾圧を続ける。

ポルトガル・イエズス会の司祭ロドリゴは、マカオで漂流中の日本人漁夫キチジローを助けた事から、その案内で長崎に密航。秘かに宣教活動を進めるが、キチジローの裏切りもあり、捕らえられ、信徒が拷問されたり、処刑されたりする場面を見せつけられる。

必死に祈りを捧げても、神は何もしてくれない。信徒を救うためには、「棄教」しかない、ロドリゴは踏絵を——。そのとき、沈黙の中、主の声が聴こえる。

「踏むがいい。私は、お前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分かつため、十字架を背負ったのだ」

ロドリゴは、暫く長崎奉行の監視下に置かれ、その後、日本名「岡田三右衛門」という死者の名を付けられた挙句、その妻を娶らされて、江戸に送られる。

仏教に改宗させられ、ロドリゴは、やがて死ぬ。出棺の折は、僧侶が数珠を手に見送る。で

も妻が、そつと胸に差し入れた守り刀には、十字架が——。キリスト教への帰依は、不変。心の奥底では、ロドリゴは、「転んではいなかった」。そんな余情を残して、物語は終わる。

イギリス南部にあるカンタベリー大聖堂。中世、巡礼は、ロンドンを出発、ここが最終地点。チョーサーは、その一行が、道中、各々語る話を『カンタベリー物語』に纏めた。

現在、「イングランド国教会」の総本山。その大司教は、最高位の聖職者。国王の戴冠式を司り、貴族院の一員として、政治的発言力も持つ。

権威の象徴。その大きさと豪華さには、圧倒される。多くの参拝者による賑わい。高い天井、長い身廊。色彩豊かなステンドグラスから差し込む光は、神聖を増す。

その反面、大聖堂の地下にある「クリプト」は、すこぶる静かで質素。建物を支える大きな柱は、むき出し。あるのは、墓所と礼拝堂だけ。夏の暑い日など、中に入ると、冷房が効いているが如くに、ヒヤッとする。

余り知られていないせいか、訪問者も少なく、静寂の中、荘厳さに一層、重み加わる。ここは、昔からこのように変わらないのかしら——。そう思ったら、中世が、何だかそれほど遠い昔でないような心持ちに。

揺れるロウソクの祭壇の前。立ち止まり、暫し見つめっていると、十字架の向こうから、何やらキリストの声が、聴こえる。

「信じなさい。そうすれば、救われるから——」

